平野谦全集

第六卷

Ⓢ 新潮社版

発　行／昭和四十九年十一月二十五日
三　刷／昭和五十一年　六　月　十　五　日
平野謙全集　第六巻
著　者／平野謙
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社　郵便番号一六二　東京都新宿区
矢来町七一　電話東京二六六－五一一一（業務）
二六六－五四一一（編集）　振替東京四－八〇八
印刷所／塚田印刷株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Ken Hirano, Printed in Japan 1974

平野謙全集／第六巻■目次

さまざまな青春

序章　坪内逍遙・二葉亭四迷・森鷗外……8
一章　魚住折蘆……45
二章　真山青果……78
三章　近松秋江……97
四章　広津和郎と菊池寛……130
五章　竹内仁……183
六章　葛西善蔵と嘉村礒多……221
七章　古田大次郎……252
八章　尾崎一雄・中野重治・伊藤整……266
九章　井上良雄……312
十章　小林多喜二……340
十一章　亀井勝一郎……370
十二章　小林秀雄……396

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

終章 伊藤整 …… 413
後記 438

平野謙全集

第六巻

さまざまな青春

序章　坪内逍遙・二葉亭四迷・森鷗外

ずいぶん以前から、私の頭のなかにはひとつのシェーマがあった。坪内逍遙の『一読三歎当世書生気質』と二葉亭四迷の『浮雲』と森鷗外の『舞姫』との比較検討による日本インテリゲンツィアの原型を確認したいという図式である。この三つの作品の比較とそれを書かせたそれぞれの作家態度の究明をとおして、そこに日本インテリゲンツィアの型を明らめてみたい、と思っていたのだ。無論、こういう私の希いは決して独創的なものではなく、誰でも一度は思いつきそうな陳腐なテーマにすぎない。しかし、私は一部の文学史家にみられる『浮雲』の主人公内海文三の過大評価と『舞姫』の主人公太田豊太郎の過小評価に、かねがねあきたりない思いをしていた。そういう文学史的評価によれば、『当世書生気質』の主人公小町田粲爾の前近代性など、ほとんど最初から歯(おお)するにも値いしないこととなる。私といえども小町田粲爾と内海文三とにみられる前近代的と近代的、オプティミスティックとペシミスティックの対照がひとつの対極をなすことは、これを認めざるを得なかった。しかし、その対極の中間に太田豊太郎を導入してみれば、太田豊太郎こそ明治二十年前後のインテリゲンツィアの最もリアリスティックな肖像ではないか、というのが私の漠然たる予想だった。太田豊太郎の処世の型に、私は明治の知識人におけるひとつの必然を確認し、そのことによって、小町田粲爾のあまりに古びた封建的な肖像も、内海文三のあまりにイデアリスティッシュに近代的なそれも、ふたつながらしりぞけたい、と思いさだめていたのである。

しかし、今度日本の知識人のさまざまな社会的適応・不適応の型を、文学作品を通じて歴史的に調べなおす課題を与えられることとなり、その初頭を飾る前述の三つの作品を読みなおした結果、やはりそれが近代日本のインテリゲンツィアの原型をかたちづくっていることは認めながら、必ずしも以前から抱いていた私の予想とは合致しない面も出てきたりして、私は私なりに考えなおす機会を得ることとなった。一口にいって、坪内逍遙についていささか新しく思いなおすところがあったのである。与えられた課題に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どの程度添えるかは予測しがたいにしても、私一個としてはまず三つの作品の印象から書きだしてみたいと思う。

よく知られているように、『一読三歎当世書生気質』は明治十八年（一八八五年）六月から翌十九年一月にかけてパンフレット形式で分冊刊行された。ときに安政六年（一八五九年）五月生れの作者坪内逍遙は、数え年で二十七歳だった。また、『浮雲』は明治二十年六月から二十二年八月までかかって、第一篇、第二篇、第三篇と発表刊行された。ときに元治元年（一八六四年）二月生れの作者二葉亭四迷は、数え年で二十六歳だった。また、『舞姫』は明治二十三年一月に《国民の友》誌上に掲載された。ときに文久二年（一八六二年）一月生れの作者森鷗外は、数え年で二十九歳だった。明治二十年前後に発表されたこの三つの作品が、すべて書生あるいは書生あがりを主人公としながら、当時の最もすぐれた二十代の青年インテリゲンツィアによって書かれたということは、日本の近代小説がいつごろどういう作者の手によって開幕されたかという事情を解きあかしている。断わるまでもなく、書生とは大学あるいは専門学校の在学生という当時の新しい社会的階層を示しており、それら書生の大部分は旧武士階級の子弟として、ヨーロッパの学問を身につけることによって、失われた社会的特権をもう一度とりもどしたいと希うアムビシャスな青年群にほかならなかった。そういう新しい青年群の生態や環境がどういうものであったか、卒業後にそれらの青年群がどういう社会的序列に組みいれられ、そこでどういう新しい問題にそれぞれ逢着しなければならなかったか、は明治二十年前後においてたしかに興味ある問題にちがいなかった。それは明治維新以後の社会的な再編成のトップをゆくひとつの新事態だった。それがおなじ書生あがりの作者の手によって採りあげられ、小説作品にまで定著されたのがはからずも日本の近代文学の開幕となったという事実は、いかにもさもありなんと頷かれる。それは日本の知識人がどんな状況のもとにいわゆる近代的自我に目覚めていったか、その目覚めがどういう盤根錯節を経て今日現在におよんでいるかのウールテュープスを示している、といってよかろう。私はできるだけ諸家の研究を参看し利用しながら、まずその問題を整理してみたいと思う。

『当世書生気質』がわが国最初の近代的な文学理論書たる『小説神髄』の応用篇として書かれたことは、よく知られていよう。実際には出版社の都合で『当世書生気質』の方が『小説神髄』より先に刊行されはじめたが、ともかく一個の体系的な文学理論を抱懐した新知識が、それの応用として小説を書き示したということは、おそらくわが小説史

上最初のできごとだった。「予輓近『小説神髄』と云る書を著して大風呂敷をひろげぬ。今本篇を綴るにあたりて、理論の半分をも実際にはほと〳〵行い得ざるからに、江湖に対して我ながらお恥しき次第になん。但し全篇の趣向の如きは、専ら傍観の心得にて写真を旨としてものせしから、勧懲主眼の方々には或はお気に入らざるべし」という「はしがき」は、その間の事情をよく物語っている。

しかし、逍遙自身後年に「旧悪全書」の最たるものと認めていたらしい『当世書生気質』を、今日の私どもの眼で読みおすとき、理論と実践、意図と実現のあまりな距たりに一驚するとしても、大して不思議ではない。一口にいって、『当世書生気質』が刊行されたとき、当時の読書界が新鮮な驚きをもってよろこび迎えたという実感は、今日の私どもにはほとんど全く失われてしまっているのである。「見送る書生、見かえる田の次、目にかよわせる相互の真情、いと切なりとは見えながら、恋とは見えず、恋ならぬ、中とも見えぬ両人をば、かゝる筋には取別て、ぬけ目ない〳〵小年さえ、小首かしげて不審貌」という小町田と藝者田の次との最初の出逢いの描写をみても、『浮雲』や『舞姫』の近代的な描写との逕庭に、私どもは驚かざるを得ないのだ。以前、私は小町田と田の次との密会における「トいいかけてひざにすがりつき、てぬぐいだしてなきがおのなみだをひたとおさえたり」というような描写のおもしろさにふれて書いたことがあるが、当時の書生どもの英語まじりの会話の風俗史的な興趣や、「手拭かみしめ、身をふるわし」というようにまだ手巾を持っていなかったらしい当時の藝者の生態などをぬきにすれば、果してこれが近代小説の濫觴とよべるかという疑問さえおさえがたいほどである。ついでにいえば、斎藤緑雨がはじめて坪内逍遙を訪問したのは明治十八年八月四日のことだが、当時、緑雨は花柳界では「ハンケチさん」の異名でとおっていたという。けだし、緑雨はハンケチで口をおおいながら伏し目がちにものをいう癖があったからだそうだ。してみれば、明治十八年現在にはハンケチそのものもハンケチという言葉も流通していたはずである。『当世書生気質』は明治十八年度ではなくて明治十五年前後の書生界の風俗をうつしたものだから、十五年ころはまだ手巾はなかったかもしれず、あっても手巾とかハンケチというような生硬な言葉を地の文でつかうことを作者はいとったのかもしれない。つまり、明治十五年前後の書生を中心とする風俗史的なおもしろさをのぞけば、それはまだなにほども近代小説の名に値いしないといってもいい。しかし、そう思うのは今日の私どもの眼からいうことであって、それが歴史的な評価として誤りなしとは保証しがたいのである。

正宗白鳥は『当世書生気質』について、「先生の創作中、最も興味のあるものゝ一つであると、私は信じている。文章は江戸文学の調子をそっくり伝えていて、何等の新味も見られないが、しかし、明治十年代の学生気質、東京風俗、文明開化を謳歌していたあの時代の面影が自ら作中に映っている。その点では、黙阿弥のザンギリ芝居や末広鉄腸の政治小説、その他あの頃の著作のどれも、『書生気質』には及ばないのだ。趣向を凝らされた小説や戯曲よりも、無心にして書き流された『書生気質』に、却って純粋な作者の持味を私は感ずるのである」と、かなり同情的な批評をくだしている。白鳥は第一に風俗小説としての美点をあげ、第二に「純粋な作者の持味」の横溢をあげているわけだが、おそらくこの批評は慎重な検討に値いすると思われる。中村光夫の『風俗小説論』を一典型として、私どもにいわゆる風俗小説を貶価する偏見がなかったわけではなく、また、煥発の才気を駆って感興あふるるままに書きあげた『当世書生気質』に『細君』や『桐一葉』とはちがった「作者の持味」がみられることも事実である。「談理」に耽るを警戒し、「記実」を旨とする逍遙本来の文学的志向に、『当世書生気質』はかえって見合っている、というべきかしれぬ。柳田泉は『当世書生気質』の文学史的意義として、一、『小説神髄』の理論を具現していること、二、叙述が戯作ふうの説明から描写に進んでいること、三、個性の描写にある程度の成功をみせていること、四、文章の新鮮味、五、インテリ階級を作中人物とする先駆をなしたこと、六、構成上に西欧文学の手法を加味したこと、の六点をあげている。歴史的評価はある点で相対的なものだから、柳田泉のあげている長所もおそらく妥当だろうとは思うものの、作者が実作にあたって一定の方法論を自覚していた点やインテリ群像を主人公とした点などをのぞけば、今日の私どもには化政度の戯作とほとんど逕庭ないようにさえ思われる。むしろ「新旧両時代の橋梁となれるもの」と明治三十九年に批評した早稲田文学記者の評言の方が、正鵠を射ているというべきではなかろうか。よかれあしかれ、『当世書生気質』は過渡の作にほかなるまい。

しかし、私はここで『当世書生気質』の作品論を展開するつもりはない。そこに登場する青年群像の生態や処世について気づいた二・三の事実を、その作家態度とからめて書きとめておきたい、と思ったまでである。

さきにふれたように、また誰でもが指摘するように、『当世書生気質』の書生どもはやたらに英語まじりの会話をかわす。たとえば、「吉原」のことを「グッド・プレイン」と、「しろうと」のことを「ホワイト」と、「藝者」のことを「シンガア」あるいは「キャット」と彼らは発音す

る。その他、作者は「放蕩」と書いて「プレイ」と、「いろ」と書いて「ラブ」と、「あれ」と書いて「シイ」と、「恋着」と書いて「リイベン」とルビをうっている。「グッド・プレインにプレイしようか」などと、当時の書生どもは叫んだものらしい。これは彼ら自身の一種の特権意識をあらわすとともに、テキヤ仲間の符牒のように閉ざされた特定の社会圏の形成を示している。作者は書生の生態を写す途中で、「本篇中に写しいだせる書生の如きは概ね書生界の上流を占るものなり。故に其語らう所もやゝ高尚なる所ありて、今日市中を渡りあるくガラクタ書生とは大いに異なり。勿論左様の書生は官立大学の学生に多く、私塾の生徒には稀なるものなり。私塾の書生輩の情態の如きは陋猥にして野卑、殆ど写しいだすに忍びざるものあり」と、興味ある註釈を挿入している。さらに、その註をのちに補正して、「作者が件の註釈を添えしは彼の守山と小町田とが相語らえる事の趣きやゝ高尚に渡る所ありて、世人が常に聴く所の書生の内幕話に異なる由あり。故に活眼家に怪まれんかと、些と分解を添えたるなりしが」と書き、書生全体についていえば上中下くらいの別があって、本篇ではその上流、中流の書生の生態を写すにとどめ、「最下等の書生」についてはわざとこれをはぶいた、と断わっている。早稲田大学文学部の創設者たる坪内逍遙にして、明治十八年にはまだ官立大学と私立大学との学生の質を区別しているところや、「最下等の書生」の生態は写すに忍びないと断わっているところがおもしろい。今日の私どもの印象からすれば、ここに写しだされた学生群像は全体として猥雑そのもので、まだその下があるのか、といささか呆れざるを得ない。しかし、注意すべきはそのことではなくて、さらに作者が語を次いで、「今や学に東京に遊ぶもの其数万人上中下の割合は大概匹敵すと想像せらる。作者の微意は其三分の二を化して上に加えまく望むに他なし。本書中の人物に、玉すくなく瓦多きは、即ち此比例を示すものなり。書生は悉く卑劣陋野なるにあらず。地方の父兄誤って、瑕なきの玉に瓦礫の冤名を負わしむるなかれ」と結んでいる事実である。これは作者が《自由燈》に寄せて『書生形気の主意』を論じた一文の最後を、「書生悉く放蕩野陋にあらざれども其多数の風儀を見れば隠居〈著者自身のこと〉が拙著の中に於て叙したる者にもいや優りていと苦々しき者あるを見ん謂う四方の学生諸子相共に奨誡して彼の麁暴なる気質を矯め彼の惰弱なる風習を匡し真に国家の元気となるべき有為の性質をやしない給え」と結んでいることとも照応している。こういう断わり書きは江戸時代の好色本の作者のそれと同一の、ほとんど常套的筆法にすぎない。しかし、「放蕩野陋」な好色的生態を叙しながら、最後に道

学者めいた口吻で訓戒をたれるという筆法が、果して常套的な遁辞か、作者本来の道義的性格の流露かは、にわかに断定しがたいところである。この点は白鳥の「作者の持ち味」云々の評言とからめて、のちにもう一度ふれる予定である。

いま私が注意したいのは、「いろ」にラブと、「恋着」にリイベンとルビをふりながら、『当世書生気質』にほとんど近代的な恋愛が描かれていないという事実である。明治十四・五年の学生風俗を描きながら、自由民権運動のような政治的な諸契機がほとんど反映していないのも一応奇異に感ぜられるが、これは当時の功利主義的な政治小説に対する反措定として『当世書生気質』が成立している作者の文学理論にかんがみて、納得されぬでもない。しかし、近代的な恋愛ではなく、そこにあるのがせいぜい欲情か情事でしかないのは、その罰則としてきびしい帰塾の門限時間や停学・退学などの制度が存在していることと照応している。現に、主人公格の小町田は田の次との情事の噂がたち、退学に処せられるところを、学業優秀のため罪一等を減ぜられて停学処分になっている。こういう戦前の中学生じみた罰則の存在は、逆に当時の書生どものメンタリティを示唆するものといえよう。いわゆる青雲の志をいだいて、徴禄した家名を興すべく、東京に集まった書生たちは、ヨーロッパふうの学問をまなんで、英語まじりの会話をとりかわすとはいえ、その中味はまだ封建的なものに骨がたしになっていたのだろう。おそらく女性なども彼らの欲情の直接的なはけ口としてしか現前しなかったにちがいない。彼らの放恣、猥雑の由来する所以がそこにあり、それに見合うものとしてきびしい罰則の存在などもあったに相異ない。

しかし、それは単に作中人物だけのことではない。それを描く作者の語り口そのものもまた前近代的なものにほかならなかった。作者は章を改めるごとに「人間終極の目的は快楽なり」とか「人は情慾の動物なり」とか馬琴もどきに説きおこしているが、その点はしばらく措くとしても、書生を上中下の三等に区別したごとく、恋愛も上中下の三つにわけて「上の恋」とは「其人の気韻の高きと、其稟性の非凡なるとを、景慕するより起れる恋にて、御前上等上々吉。恋の座頭ともいうべきなり」と規定しながら、そう説く中味の叙述そのものは全く貧弱である。それに反して、「中の恋」および「下の恋」を説く作者の筆はすべるがごとく、「男女互に相愛して、生ては人力車に相乗なし、死しては蓮台にて一所にすみ、なろう事なら比翼の鳥、儘になるなら連理の枝、妾は時々に呼吸器となって、郎が浮気なる口元を塞がん、僕は折々に帯留と変じて、卿が解やすき下紐を押えん、郎と一所に暮すなら、憂を御山の詫住居、

ぬい針仕事糸ぐるま、苦しき賤の手業をも、何のいとしい郎じゃもの、死んでもわたしが女房じゃ」というようなのが「中の恋」であって、「こは肉体の快楽をば、唯専一に主眼として、男女相慕う情をいう、すなわち鳥獣の慾これなり。五円金を与えてニャア〳〵を聘す髭の旦那、一円金を投じてゴロンバタンを持つ田舎紳士は、些申兼たいいぶんなれども、やはり此仲間のお仁にこそ、是等は浅ましき下恋ゆえ、葛西の背兄も鼻つまみて、是ハア柄杓にかゝらぬとて」云々というのが「下の恋」だと、作者はキタナイ洒落をしゃれのめしている。作者が最も力をこめて説明しているのはいわゆる「中の恋」であって、これをみれば、作者にとって「上の恋」とは名ばかりのつけたりにすぎぬこともよくわかるのである。また、作者にはこの恋愛論に匹敵する興味ある遊女論があるけれど、いまは省略したい。その趣旨は「客もし汝〈媚妓のこと〉の情を求めず、たゞ花香のみを買うにいたれば、貸座敷の害も大に減じて、野合を防ぐ一個の機械と、世に貴まるゝようにもなりなん。あなかしこ力めよやとは、是また作者の出放題なり。まじめで信るは野暮なり、野暮なり」というあたりにあった。

こう書いてくると、『当世書生気質』ならびにその作者はいかにも前近代的そのもののように思われるが、さきにふれたように、そう感ずるのは今日の私どもの感覚であって、才子佳人や英雄豪傑ではなく、書生という新しい階層の群像を主人公にえらんだことや、それを書いた作者自身が東京大学を卒業した最高の知識人だったことは、やはり劃期の一事件にちがいなかった。官吏や実業家ではなくて一著述家という自由職業の道をわれからえらんだことや、そういう自由職業の首途にふさわしく、書生の生態を一篇のテーマにえらんだことは、当時にあっては先駆的なできごとだったに相異ない。二葉亭四迷も尾崎紅葉も坪内逍遙がみずから撰択し、きりひらいた文学者の道に勇気づけられ、はげまされて、そのあとにつづいたのである。

帝国大学令が公布されて、近代官僚の養成機関たる形式内容を確立したのは明治十九年（一八八六年）三月のことだったが、帝国大学の前身たる東京大学においても、逍遙が卒業した明治十六年ころには、すでに「すえは博士か大臣か」という実質をそなえかけていたはずである。官途か実業につくか、そうでなければ代言人（弁護士）になる同輩をしりめにかけて、逍遙が敢然として一著述家の道をえらんだのは、おそらく今日では想像もできぬ特殊なケースだったにちがいない。

こういう作者の処世コースはまた作品自体にも反映していて、当時の国家体制に対する批判などはいささかもみられぬ上昇的なオプティミズムに支配されながら、露骨な立

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com